

14  
インド(その二)

バンガロールのオートバイ・ラリー

井上恭子

インドでは、自動二輪車が軽便な庶民の足として重用されている。バスよりは金がかかるが、動きが自由で、もちろん自家用車よりは絶対に安い。自動車は無理だというサラリーマンでもなんとか買える。いちばん手軽な自動二輪車は小型モーター付き二輪車のたぐいで、値段の手ごろさで普及している。それを少しおしおしやれにした五〇cc自動二輪車も最近普及している。これは、初心者や女性に人気がある。

スクーターも根強い人気がある。スクーターには、どことなく「家族持ち」の印象がある。お父さんがハンドルを握り、その足の間に少年が立ってハンドルにしがみつき、後ろの席にはお母さんが小さな子供を抱いて(時には二、三人も抱いて)横座りに乗っかっているというのをよく目にする。

いわゆるオートバイは、日本のオートバイ・メーカー四社がそれぞれインド企業とタイアツプして一〇〇ccオートバイの生産・販売を開始したことで、新しい時代を迎えた。それまでの威圧的な重量級のオートバイではなく、スマートでしかもパワーのあるオートバイは、消費者の嗜好に合っていたようで、販売は急速に拡大している。

#### バンガロールの

#### オートバイ事情

バンガロールはインドのほかの都市とくらべて、自動二輪車の普及率が高く、自動二輪車のなかではオートバイの普及率が高いそうである。各都市を訪れてバンガロールと比較してみた筆者の印象もそのとおりである。さらに、オートバイのなかでは、日本企業との提携生産オートバイの普及度が群を抜いて高い。まず若者がとびつき、徐々に上の年齢層に広がってきている。

日本のA社、B社、C社、D社系の一〇〇ccオートバイが、どの層に、どういう理由で受けているのかを、オートバイ好きと話したことがある。それによると、元気の良い若者は、A社のオートバイを好むという。理由が面白い。A社のオートバイは瞬発力があって出足がよいため、交差点で「ゴー」サインが出るやいなや先頭を切って飛び出せるそうである。渋滞に巻き込まれないし、競り勝った気分も味わえるという。B社のオートバイは、出足は劣るが持続力に優れており、先行されてもA社のオートバイに追いつき追い越せるのだそうである。そういうわけでB社のオートバイは、少し年長ではあるが若者にはまだまだ負けられないという世

代が好むという。C社のオートバイは世界的に有名である。名前が与える安心感が、販売に大きく寄与しているようである。一流企業のサラリーマン向けとも言われる。彼らは、保守・安定指向があり、一般的にオートバイの機能には関心が薄く、知名度で決めるのだそうである。D社のオートバイは燃費が良いという評価を受けている。実質主義者好みというところであろうか。

### 胸躍るラリー出発風景

バンガロールでは、オートバイ・ラリーがしばしば開催される。ただしオートバイだけのラリーではなく、自動車ラリーと組み合わせられている。タバコ会社、剃刀会社、男性用化粧品会社などがスポンサーになっている。インドには、ヒマラヤ・ラリーなどの全国ラリーがある。しかし都市単位のラリーは他ではちよつと見かけない。ましてやオートバイ・ラリーとなると、さらに稀である。

自動車ラリーの出発はさほど弾まないが、オートバイ・ラリーの出発風景はわくわくする。参加者の高揚した気分が直接伝わってくるからである。種類の多様さも楽しい。イギリス渡来の古いエンフィールドが姿を現せば、インド陸軍御用達のメーガドゥートがあつたり、チェコとの技術提携のヤフワ・オートバイが出てきたり、さらには古びて素性が判別しがたいオートバイもある。多いのはやはり日系の新型一〇〇ccオートバイである。一方、装備の多様さにも目を奪われる。計器類がないオートバイもある。どうやってラリーができるのか不思議だ。

ラリーの種類も、西ガーツ山脈を横断してアラビア海沿岸を走って戻ってくる中距離ラリーから、一泊の短距離ラリー、また、徹夜ラリーといった恐ろしいラリーもある。道の悪さや暗さを考えると危険このうえない。手探りラリーというのもスリルがある。地図は示されず、何キロ走って右折、さらに何キロ走って左折といった指示だけが与えられる。これこそ計器がなければどうにもならないが、参加者はそんなことには頓着しないようだ。

### スーパースター

#### 「無敵のデュオ」

バンガロールのオートバイ・ラリーの花形は、なんとといっても地元州出身の「無敵のデュオ」と呼ばれるカップルである。精悍そうなご主人と、ナヴィゲーター役をつとめる物静かな感じの美人の奥さんの組み合わせで、彼らの周りにはいつも、オートバイ少年をはじめ大勢の見物人が集まってくる。このカップルは、数多くの全国ラリーを制覇したスーパースターなのである。専属のメカニック・チームが、彼らの乗るオートバイ・メーカーから派遣されてくる。

オートバイ好きにとつて、ラリーとか「無敵のデュオ」は憧れの的である。オートバイ社会の裾野が広がってきていることは、ラリーの出発風景を見ていると感じられる。ある徹夜ラリーの出発前、人だかりがあったので近づいてみた。若い男の子が心細そうに新品のオートバイの傍らに立っている。取り巻いている人の会話を漏れ聞いてみると、この少年は免許をとったばかりだそうである。親には内緒で、友人の所に泊まると偽ってきたという。ラリーとはどう

走ればいいのかさえ知らないのだそうだ。ナヴィゲーター役になるよう説得された友人は、彼以上に途方にくれている。彼の、どうしても走りたいという圧倒的な情熱が、周りの先輩たちを動かしているようで、周囲が何くれとなく面倒をみていた。バンガロールのオートバイ文化は、着実に開花しつつある。

(いのうえ きょうこ／アジア経済研究所動向分析部)